

学 位 論 文 要 旨

氏 名 カルマール 良子題 目 乳児の自発性に基づく四つ這い獲得の運動発達過程

本研究は、乳児期の運動発達において、乳児自身の自発的な運動の重要性に着目し、特に「四つ這い」獲得の意義とその支援方法を検討した。近年、育児用品の普及や受動的座位の早期化に伴い、乳児が床面で匍匐運動を経験する機会が減少している。こうした状況を踏まえ、乳児の自発性を尊重した運動発達支援の在り方を探ることを目的に、運動発達過程の整理と、それを促す環境と支援方法の検討を行った。

第1章では、乳児期の運動発達過程の特徴を整理し、「はいはい」に含まれる「ずり這い」「四つ這い」「高這い」などの運動様式を明確に分類する必要性とその意義について検討した。保育現場や家庭で広く使用される「はいはい」は一括りに扱われる傾向があり、発達評価の際に個々の運動様式の違いが見落とされることで、支援のタイミングや方法に課題が生じていることを指摘した。また、四つ這いは単なる移動手段ではなく、粗大運動機能の発達や体幹筋力の強化、感覚統合の形成、探索行動の促進など、心身の成長に多面的に関与する重要な過程である。これらの意義について先行研究を整理し、乳児の自発的な動きを尊重する運動発達支援の理論的基盤を構築した。さらに、ハンガリー国内外で広く認知されているPikler-Lóczyメソッドを参照し、その理論と方法論の特徴を整理しつつ、日本の保育実践への応用可能性について考察した。

第2章では、乳児の自発的な運動を制限する要因を明らかにすることを目的に、事例検討・保護者アンケート調査・量的分析を実施した。事例検討では、育児用品の長時間使用や保育者・保護者による受動的座位援助が四つ這い獲得を妨げる傾向を確認し、乳児が自由に動ける床面環境の重要性を指摘した。また、保護者を対象とした調査により、はいはい動作の獲得状況と継続期間には大きな個人差があり、四つ這いを経験しない乳児の存在も確認された。さらに、生後1年間における育児用品の使用状況と乳児の運動発達との関連を分析した結果、特に抱っこ紐の長時間使用が匍匐運動の機会を制限する要因となることが明らかとなった。加えて、乳児の座位獲得の順序に着目した分析では、Pikler-Lóczyメソッドが提唱する「はいはい→座位」という発達順序に対し、日本の乳児の約6割が「座位→はいはい」の順序が確認された。さらに「寝返り→座位」という順序に対しても、「座位→寝返り」の順序で発達している乳児が1割存在していることが明らかとなった。この背景には、日本の育児文化や保育現場において座位や立位姿勢を援助する習慣が関与しており、特に受動的な座位獲得の早期化が四つ這い経験の減少を招いている実態が浮き彫りとなった。

第3章では、これまでの知見をもとに、乳児が本来持つ力を十分に発揮できるよう支援する保育プログラムの開発・実施・効果検証を行った。乳児は、自らの意志で動き、環境と関わる中で発達していく力を備えている。そうした自発性を尊重し、引き出すことを目的に、Pikler-Lóczyメソッドを基盤としたプログラムを設計し、保育者向けの研修を実施した。研修では、座位を早期に援助するのではなく、乳児が自らの動きで座位を獲得する過程を大切にすること、また、自由に動ける環境を整える方法についても保育者間で共有した。その結果、床面環境の改善が進み、乳児が自分のペースで匍匐運動を繰り返しながら、自然な流れで発達していく人的及び物的環境が確保された。対象となった7名の乳児は、寝返り・ずり這い・四つ這いを経て、自らの力で座位を獲得する姿が見られた。これは、乳児の自発的な運動経験が積み重なった結果であり、運動発達過程に一貫性があることを示している。また、従来の評価尺度では捉えにくい、乳児が自らの力で発達していく姿を丁寧に観察することで、運動発達支援に新たな視点をもたらす成果が得られた。

第4章では、第1章から第3章までの研究成果を整理し、研究の到達点及び今後の課題と展望を明らかにした。特に、WHOが提言する乳幼児の身体活動促進ガイドラインの国内普及の遅れを指摘し、保育現場や家庭育児への普及と実践の必要性を提言した。また、全国規模での実態調査の実施、家庭育児を対象とした支援プログラムの開発、多職種連携による発達支援体制の構築、進級及び就学猶予制度の提案、保育者研修や保護者啓発活動への応用可能性についても考察を行った。以上の成果をもとに、乳児保育内容の具体的改善と発達支援の質的向上について今後の展望を述べた。